

「自然の中から大発見! 生き物から学んだワザとチカラ」

現代の私たちの暮らしは、雑草が伸びてくれば草刈り、虫が出てくれば駆除など、自然に興味を持つ前に、まず距離を置いてしまいがちです。

しかし、植物や虫をよく調べていくと、生き物に含まれる成分や体のつくりには、驚くべき秘密が隠されており、現在は、

それを使った撥水スプレーやスポーツ飲料などが開発されています。

今回の展示では、自然は私たちの暮らしに役立つ大発見を秘めていることをテーマに、生き物から学んだ技術を紹介します。



昨年の移動展の様子

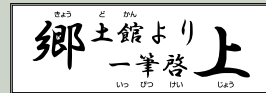
◇9～10月の展示会場

各会場の最終日の展示は正午までとなっています。これ以後の展示会場は広報しべちゃ10月号で掲載する予定です。

- 9月19日(金)～26日(金) 阿歴内公民館
- 9月29日(月)～10月3日(金) 茶安別農村環境改善センター
- 10月6日(月)～10日(金) 虹別酪農センター
- 10月14日(火)～22日(水) 磯分内酪農センター
- 10月23日(木)～30日(木) 図書館

大川のほとり

—郷土館だより(第63号)—
☎487-2332
開館時間
午前9時30分～午後4時30分



初夏からぐずぐずと雨が続き冷夏かと思うと、急に暑い日がやってくるなど、不思議な夏でした。そのせいか、今年は花の咲き方も虫の出方もまちまちですが、例年この季節はスズメバチが多いので、ご注意ください。(辻)

ていました。四郎助が4歳の時に明治元年となり、翌2年に士族の有馬平八の養子となりました。四郎助はこの時より有馬姓を名乗る事になります。ただし有馬家に引き取られたわけではなく、以降も実家益満家で生活したことから、戸籍上の養子縁組でした。

これは明治期の新たな戸籍法が大きく関係しています。戸籍法が明治4年に施行されると、それまでの身分制度が廃止され四民平等となりました。しかし支配階級であった人々はそれぞれ皇族、華族、士族の称号を



有馬 四郎助

『人物叢書 有馬四郎助』より引用

有馬四郎助は益満喜藤太の四男として、鹿児島鹿兒島市下荒田町にて江戸末期の文久4年(1864年)2月2日に生まれました。益満家は代々鍛冶業を営んでいる家柄で、職人や徒弟を抱え、薩摩藩に関係する御家人との関わりも深くもっており、その功績により士分(武士階級)となつ

ります。

最終話を飾るのは釧路集治監に看守長・書記として勤務し、後に大成して網走監獄長となった有馬四郎助です。四郎助は、釧路集治監在監時に周辺の人々から大きな影響を受け、監獄長となつてからは懲罰主義的な監獄から温情主義的な監獄へ改良を行い、出所した人への更生保護を行いました。その愛情溢れる人物と功績から「愛の典獄」と呼ばれ、我が国の更生保護史に足跡を残した人物です。

明治18年標茶市街に設置された釧路集治監。そこでさまざまな罪により収監された囚人たちが幕末の動乱を経てこの集治監に勤務した職員たちの人生を伝記に近い形で取り上げた釧路集治監人物伝は、今回で最終話となります。



釧路集治監人物伝 最終話 前編

釧路集治監看守長 愛の典獄 有馬 四郎助

これ、な〜んだ？ その9



郷土館の脇の草むらに丸いかたまりがあちこちに落ちています。色も大きさもジャガイモそっくり。誰かがイモを落としていったのでしょうか…？



これはマクキヌガサタケというキノコ的一种。ジャガイモのような殻からキノコが出てきます。

図鑑によればこのキノコは食べられるとありますが、堆肥みたいなすごい悪臭がするので、あえて食べようとは思わないキノコです。

職業体験からこんにちは!

郷土館に職業体験のために来た小渡さんに、郷土館で最も印象に残った資料を紹介してもらいました。

「郷土館に展示されている窓鋸の魅力」

まどのご
北海道標茶高等学校 小渡 拓



窓鋸

入植した農家の必須道具。町内で数多く使われ、郷土館には40点ほどが保管されています。

郷土館には、本町の開拓を支えたさまざまな道具が保管されています。

例えば「窓鋸」という道具には、刃の目詰まりを防ぐための窓（くぼみ）が備えられ、効率よく切ることができる構造で作られています。これは本町で農業を始めるうえで、不可欠だった伐木作業をより効率よく進めるための、先人たちの工夫でした。先人と深い関わりを持ってきた道具たちは、今も開拓時代を現在に伝えています。

法が発布されたとき、皇族以外が廃止されています。四郎助の養子縁組から3年後、父喜藤太が病没。ここから益満家は困難な時期を迎えます。益満家の家業は次男圭治が継ぎましたがまだ若く、母タメと兄弟姉妹達は父の遺したわずかな遺産を頼りに生活し苦労を重ねました。明治10年に西南戦争が起こると病気の次男圭治を残して、長男兼吉と三男矢ノ助は賊軍となった西郷隆盛率いる薩摩軍に加担。明治政府軍との戦いで戦死します。この時四郎助は13歳。鹿児島県立師範学校付属小学校高等科に在学中でした。

2年後、四郎助は抜群の成績で小学校高等科を卒業し、そのまま母校鹿児島県立師範学校付属小学校の訓導補助くんとほほになります。訓導補助とは、卒業生の中でも特に優秀な者を採用し臨時教員とする事で、四郎助の就いた師範学校付属小の訓導補助は、家柄や家庭教育なども審査される狭き門でした。この事から四郎助が生まれのはっきりとした家に育ち、すでに相当優秀な生徒であった事が伺えます。そして四郎助は教師となり、家計を支え始めました。

(中編に続く)



少年時代の四郎助 『釧路集治監に勤務した人々』より引用

得て戸籍に明記されたのです。江戸時代の影響が色濃く残っていた当時、この称号はさまざまな場面で大きく影響すると考えられていました。ただ士族生まれであっても家督を相続する長男以外は平民とすることになっており、次男三男など、形の上で家督相続人のない士族への養子に出すことが盛んに行われていました。他家の家を継ぐことで、士族の称号を得ることができたのです。四郎助の将来を考えたとき、士族であった方が何かと有利に働くという親心だったのかもしれない。なお、この江戸時代の身分制度に起因する称号は、昭和22年の日本国憲